『語用論研究』第 19 号(2017 年) pp. 1–21
© 2017 年　日本語用論学会

〈特集投稿論文〉レトリックの語用論［研究論文］

佐藤信夫の「逆隠喩」をめぐって：関連性理論の語彙語用論の観点から*

山　泉　　実
大阪大学

Although para-metaphor was proposed by SATO Nobuo in 1982 as a new type of trope, it has not since been investigated except by MORI Yuichi and MOMIYAMA Yosuke. For example, if Taro, an Olympic medalist turned politician, has been drawn into a scandal, we can express skepticism of the charges by saying, “He is a sportsman, no way!”, implying sportsmen are fair. This paper examines para-metaphor from the viewpoint of relevance-theoretic lexical pragmatics. After critically reviewing the analyses of previous studies based on the notion of stereotypes, I analyze this phenomenon as a case of lexical narrowing, a major lexical pragmatic process, via the construction of ad hoc concepts.

キーワード：　逆隠喩、提喩、語彙語用論、関連性理論、語彙的縮小

1.　はじめに

比喩は古代以来のレトリックから現代の言語研究にいたるまで重要な研究テーマであり続けている。両者を架橋した佐藤（[1982, 1983] 1987a, b）は、新たな比喩の類型として「逆隠喩」を提起した。しかし、逆隠喩は、認知言語学の文脈では多少顧みられているものの（森 2007; 籾山 2016）、語用論においては言及されることさえないようである。本研究では、近年盛んな関連性理論の語彙語用論（Wilson 2003, Wilson and Carston [2007] 2012, Wałaszewska 2015 等）の観点から逆隠喩を再考し、それに基づく分析がステレオタイプを説明概念とする先行研究の分析よりも優れていることを主張する。

* 本稿の内容の大部分は、以下における筆者の発表に基づいている：日本語用論学会第 19 回年次大会、筆者担当の大阪大学外国語学部日本語専攻「対照言語学演習」、2016 年度「言語学シュンポシオン」。多くの有益なコメントを下さったこれらの参加者、本誌の査読者 2 名、本誌編集委員長、及び西山佑司先生に感謝を申し上げる。なお、本研究は JSPS 科学研究費（課題番号：17K17842）の助成を受けたものである。

2.　逆隠喩とは

逆隠喩とはどのようなものか、佐藤（[1982, 1983] 1987a, b）の短い論考はそれを詳らかにしているとは言い難い。後述するように佐藤の定義は額面通りに受け取るには問題があるため、挙げられている例の検討から始めたい。しかし、佐藤の逆隠喩の例は少ない。ことばのあやを適切に特徴付けるにあたってあまり役に立たない語句だけの例を除くと、次の作例のペアと実例のペアが 1 つずつ挙げられているにすぎない。

（1）　たとえば、村会か国会かは問わず現に政治にかかわっている人物について、いつも策略をもちいたがる油断のならぬ存在という趣意を込めて「なにしろあいつは《政治家》だから」と言うようなばあいがある。おなじように、まったく逆の趣意をふくめて、「あの人は《スポーツマン》だから、まさか」と言ってその人の卑劣さについての悪いうわさを打ち消すのもおおいにありうることばづかいであろう。　（佐藤 [1983] 1987b: 125）

（2）　〔……〕是は僕の方ばかりではあるまい、千代子もおそらく同感だらうと思ふ。其證拠には長い交際の前後を通じて、僕は未だ曾て男として彼女から取り扱はれた経験を記憶する事が出来ない。彼女から見た僕は、怒らうが泣かうが、科をしやうが色眼を使はうが、常に変らない従兄に過ぎないのである。

（p. 138、夏目漱石『彼岸過迄』から）

（2）では「男」と「従兄」が逆隠喩の例とされている。これらの例は逆隠喩の確例と考えられる。他に「節制は恐れである」（佐藤 [1983] 1987b: 132）というラ・ロシュフコーによる例も挙げられているものの、これは顕在的逆隠喩とされるもので、上のもの（いわば潜在的逆隠喩）とは別のタイプに属する。本稿では顕在的逆隠喩は扱わないことにする。

次に、佐藤の逆隠喩の定義を紹介する。佐藤（[1982] 1987a）は、各種比喩（提喩、隠喩、換喩、逆隠喩）における媒体（**V**ehicle、言表されている意味）と趣意（**T**enor、言表されずに理解される意味）の外延と内包の関係を図示し、各種比喩を下のように整理している（換喩の図（佐藤 [1982] 1987a: 118）は省略）。

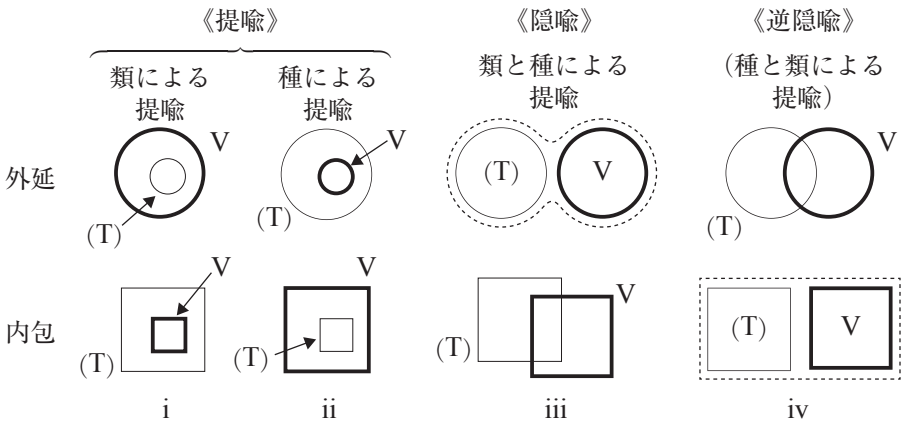

図 1　佐藤（[1982] 1987a: 112）「言語《内》の意味の関係にもとづく《転義》」より

隠喩（iii）の外延と内包それぞれにおける趣意と媒体の関係を逆にすると、つまり外延の円を内包の正方形にして正方形を円にすると、逆隠喩の図になる。隠喩、たとえば「ハゲタカ・ファンド」では、ハゲタカとある種のファンドは、外延的に重なるところがないものの、“内包”の面では〈活動しなくなったもの（動物・企業）を獲得する〉というような点で重なる。[1] 逆隠喩は逆に、政治家と嘘つき、スポーツマンと率直な人のように外延的に重なりがあっても内包的に重なりがない場合に「あの人はスポーツマンだから、まさか」と言って、その人が率直であることをも伝えるような場合に成立する。「（率直な）スポーツマン」の内包は媒体《スポーツマン》と佐藤が趣意と考える《率直な男》[2] を合わせたものであり、両者を表した正方形を包み込む点線で表される。逆隠喩においては言及されている対象に媒体のカテゴリーが必ず当てはまることに注意されたい（詳しくは 4.1）。たとえば（1）では「あの人」で指示されている者が率直であっても、スポーツマンでなければ逆隠喩にはならない。

このような現象はレトリック理論において転義現象として指摘されていなかった（佐藤 [1983] 1987b: 124）ものの、「ことばづかいのなかに広く蔓延している重要な現象ではないか」（[1982] 1987a: 115）と佐藤は述べている。現象としての重要性については筆者も同意する。

---

[1] 佐藤（[1982, 1983] 1987a, b）の「内包」という用語は注意を要する。佐藤自身が隠喩の図式の説明に使っている例でさえ、媒体と趣意に厳密な意味で内包の重なりがあるとは言い難い。佐藤（[1983] 1987b）は「女」と「花」に「内包的にある共通性（たとえば、《美しさ》その他）が感じとられる」（p. 123）と述べているが、美しさは女であること・花であることの必要条件ではない。佐藤自身このことに無自覚だったわけではないようで、佐藤（[1982] 1987a: 114）では「両者の内包的な共通部分（美しさ？　など）」と「美しさ」の後に「？」を付けている。

[2] 逆隠喩の趣意が厳密には何であるかは 4.1 節で詳しく論じる。

3.　先行研究の批判的検討

佐藤（[1982, 1983] 1987a, b）の後に逆隠喩を正面から論じた研究は森（2007）と籾山（2016）しか見当たらない。どちらも認知言語学の枠組みに依拠して、ステレオタイプの概念で逆隠喩の現象を説明しようとしている。ここでは逆隠喩に関してより多くの主張をしていると思われる前者の主張を 3 点取り上げる。

3.1.　森（2007）の主張 1：逆隠喩は種によって「代表させる提喩」の逆

森（2007）は逆隠喩を検討するに先立って、類による提喩と種による提喩の非対称性を指摘している。図 1 を見ると、両者（i, ii）はまさに対称的という印象を与える。しかし、森によると実はそうではない。種による提喩は、種で類を「代表させる提喩」であり、たとえば次の例では「パン」に「食物」を代表させている。[3]

（3）　人はパンのみにて生きるにあらず。（『マタイによる福音書』4 章 4 節）

一方、従来研究されていた類による提喩は、森によれば、通常は基本レベルカテゴリー名で呼ぶものを上位レベルカテゴリー名で呼ぶこと、たとえば人を「生物」と呼ぶことで成立する。[4] そして重要なのは、この「呼び替える」ことは代表させる提喩の逆のプロセスではないということである。この非対称性を踏まえて、「代表させる提喩」の逆のプロセスは想定できるか、あるとしたらそれは提喩となるのかと森は問い、佐藤の逆隠喩こそがそれに他ならないと答える。従って、この説では逆隠喩は隠喩の逆ではなく、提喩の一環として捉え直されることになる。この主張に対して筆者は特に異論を持たない。

3.2.　森（2007）の主張 2：種の特性が類に拡大する

件の逆のプロセスの例として、（1）の「スポーツマン」の例が森（2007）でも論じられている。本来スポーツマン全体の一部にすぎない率直なスポーツマン（図 2 のスポーツマン 2）がステレオタイプとなってスポーツマン全体へと拡大したプロセスが「逆隠喩」の正体だと主張されている（pp. 171–172）。しかし、種によって代表させる提喩では、たとえばパンから食物などへと外延が拡大しているのだから、逆隠喩がその逆ならば縮小であろう。逆隠喩の媒体とは表現の字義通りの意味であるから、（1）においては、図 2 のスポーツマン 1（類・全体）のはずである。そして、趣意とは転義のプロセスの結果であるから、図 2 では「→」の辿り着く先になるはずである。しかし、図 2 ではこれもスポーツ

[3] この文の「パン」は他のものをも代表し得る。詳しくは山泉（2006）参照。
[4] このタイプの提喩について、詳しくは山泉（2005）参照。

マン 1 になっている。媒体も趣意もスポーツマン 1 では比喩にならないため、この主張はこのままでは維持できないことがわかる。[5]

3.3.　森（2007）の主張 2：ステレオタイプを形成する推論と同一の現象

森（2007）では、籾山（2016）と同様、ステレオタイプという概念が逆隠喩の説明の中心になっている。「ステレオタイプ的思考＝「逆隠喩」的思考」（森 2007: 170）という記述もある。上述の「逆隠喩」的拡大の根底には、ステレオタイプの形成があり、「「逆隠喩」と呼ばれる言語現象は […] ステレオタイプを形成する推論 […] とまさに同一の現象を扱っているのではないだろうか」（p. 171）とまで述べられている。このステレオタイプを形成する推論とはどのようなものだろうか。そこで引拠されている楠見（1990）は、提喩に依拠する推論を 2 種類挙げている（p. 202）。一つは、ステレオタイプの形成過程にあたる、成員からカテゴリーへの推論である。ある大学の学生一部の評価に基づいて、その大学の学生全体について判断をするのはその例である。

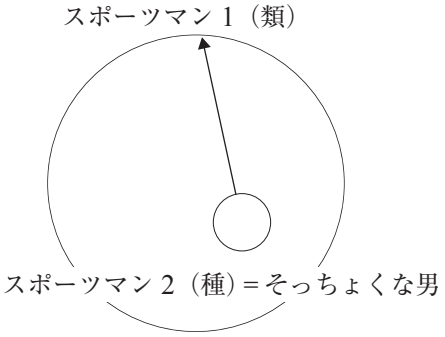

図 2　森（2007: 171）「逆隠喩のメカニズム」

（4）　A 大生の太郎は優秀だ。／A 大生の花子も優秀だ。
　　→ A 大生は優秀だ。（ステレオタイプ）

上に引用したように、森（2007）は「ステレオタイプを形成する推論」を逆隠喩と同一視している。もう一種の推論は、カテゴリーから成員への推論で、その代表例としてステレオタイプに基づく推論がある。あるカテゴリーに属する対象が、そのカテゴリーのステレオタイプの持っている属性を持っていると推論するものである。

（5）　スポーツマンは率直だ。（ステレオタイプ）／太郎はスポーツマンだ。
　　→ 太郎は率直だ。

[5] 森雄一（私信）によると、森（2007）では明示されていないものの、「種にのみあてはまる現象だったのが類に拡大する」プロセス（これを図 2 は表しているとのこと）と、それと表裏一体となる「代表させる提喩」と方向性が逆になりかつ呼びかえる提喩ではない「類による種の置き換えの提喩」の 2 つが逆隠喩について想定されていた。両者を区別するのであれば、（森氏は表裏一体としているものの）2 つは段階が異なり、本文に指摘した問題はない。

（1）の背後にある推論もその例と言える。この 2 種類の推論を比べてみると、聞き手が逆隠喩を解釈するために話し手が促しているのは、森（2007）の説明に反し、明らかに後者の推論である。なお、このように先行研究はステレオタイプの概念に訴えて逆隠喩を説明しようとしているのに対して、本稿の説においてはステレオタイプはあまり重要な役割を演じない。この点に関しては 4.3 で詳しく論じる。

4.　分析：語彙的縮小としての逆隠喩

逆隠喩の先行研究の所論に問題があり、この主題についてさらに考察する余地があることが明らかになった。本稿の説を提示するにあたり、逆隠喩の規定から検討を始める。

4.1.　逆隠喩の趣意の外延：拡大したのか縮小したのか

逆隠喩の規定において内包よりもさらに問題となるのは、図 1・iv で 2 つの円で示されている外延である。それによれば逆隠喩の趣意は左の円全体ということになる。たとえば、佐藤（[1982] 1987a: 115）の記述によると、（1）の「スポーツマン」の趣意は率直な男たちという、外延的にはスポーツマンたちと部分的に重なるもので、図 1・iv の左の円──スポーツマンであってもなくてもとにかく率直な人たち[6]──に対応するということになる。しかし、逆隠喩の趣意の外延を成すのは、媒体の元々の意味もあてはまるものでなければならず、率直であってもスポーツマンでない人は（1）の逆隠喩の趣意には入らないはずである。この点は、逆隠喩を規定するにあたって決定的に重要であり、以下で詳しく論じる（先行研究の見解については籾山 2016: 注 21 における森・籾山両氏のやり取りを特に参照）。

（1）の趣意が率直なスポーツマンだけならば、それには逆隠喩の外延の図の 2 つの円の交差部分が対応し、佐藤の図は不正確ということになる。もし逆隠喩の趣意が佐藤の図の通りに左の円全体であったら、スポーツマンでない率直な者についても「あのひとはスポーツマンだ（から）」という逆隠喩が可能になってしまう。しかし、そのような例は佐藤（[1982, 1983] 1987a, b）の挙げた語単独ではない確例にはなく、籾山（2016: 95）が述べているように、むしろ隠喩とすべきである。佐藤が逆隠喩を隠喩の逆と考えて、あえて新たな比喩の類型として提起したのに、既存の隠喩というカテゴリーに問題なく含められるものを逆隠喩と考えていたとは想定し難い。そして、佐藤（[1983] 1987b）自身、「政治家」の例について、（1）に引用したように「現に政治にかかわっている人物について」

[6] 佐藤（[1982, 1983] 1987a, b）は「そっちょくな男たち」としているが、以下では議論を簡単にするため、「率直な人たち」とする。

(p. 125) と言っていることからもこのことは疑いない。したがって、逆隠喩の趣意は図 1 の外延の交差部分だけだと考えるのが妥当である。[7] 佐藤の内包と外延の図式は、逆隠喩を発見するのには役割を演じたものの、それ自体は発見した現象の規定として不適切であった。佐藤が逆隠喩として考えていたものは、確例とそれについての記述から探るべきであると述べた所以である。逆隠喩における外延の変化は、図 3 に示したように縮小ということになる。

逆隠喩は拡大と縮小、正反対の二つの見方が可能なのだろうか。これに関連して、佐藤（[1983] 1987b）は、これまでのものと本質的に同様の逆隠喩の例について次のように述べている。「《竹を割ったような気性の人々》を不当に一般化して《江戸っ子》全般にまで拡張したのだ、という判定は、逆に、《江戸っ子》を、その集合の一部分しか占めていないはずの《竹を割ったような気性の人々》に特殊化したのだ、という判定とうらはらであって、たいてい、一般化とか特殊化という表裏の言いかたは、それだけでは事態の一面を記述するにとどまる」(p. 126)。これに従うと拡大説と筆者の縮小説はどちらも一面的ということになりそうだけれども、筆者はそうではないと考える。なぜなら、佐藤（[1982] 1987a）が主張するように、媒体と趣意の「両者は対等に相互作用をおよぼし合ったり等価で交換されたりするような、おなじステイタスにあるもの同士ではな」く、後者は前者を「手がかりとして新しく成立する」(p. 108) からである。

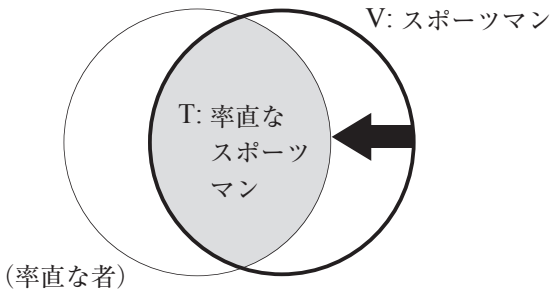

図 3　語彙的縮小としての逆隠喩

具体例を元にこの点を敷衍する。江戸っ子と気前の良い人々[8] の外延は、図 3 と同じよ

[7] 本稿の見解が正しいとすると、図 1・iv の「(種と類による提喩)」という記述も誤りということになる。これは、グループ μ（[1970] 1981）流の提喩による比喩の分解で、たとえば次のようになる：〈率直な人〉―種による提喩→〈率直なスポーツマン〉―類による提喩→「スポーツマン」。【レトリックは、元々がよりよく表現するための技法であったため、現代においてもこのように話し手の立場からの、表現内容から表現形式への方向で論述されることが多く、そのような記述は森（2007）にも見られる。対して語用論は、解釈プロセスが最も中心的な関心であるため、聞き手の立場で論述が行われることが多い。もしかするとこの方向性の違いが、森（2007）の拡大説と、筆者の縮小説の対立の根底にあるのかもしれない。】しかし、この例の趣意が率直なスポーツマンだとすると、逆隠喩をこのような提喩の組み合わせとするのは不適切である。なお、このタイプの提喩の組み合わせ（の適切なもの）は、グループ μ の分類では不可能とされるパターン（(Sp＋Sg) ∑）であるけれども、内海（2008）は可能（例「赤い声」）としており、筆者も内海に同意する。

[8] 竹を割ったような気性がどのようなものか筆者にはよく分からないため、同じく江戸っ子のス

うな一部重なる 2 つの円で表すことができ、両者の関係を利用した次のような逆隠喩が可能である。

(4)（江戸っ子である太郎の友達が彼の誕生日パーティーをレストランで開いてくれた。太郎は全員分の料金を支払った。）友達：さすが江戸っ子だねぇ。

拡大説ではどこから出発するのかが問題になる。一つの可能性は、上の引用に従って「《気前の良い人々》を不当に一般化して《江戸っ子》全般にまで拡張した」と考えることである。しかしこの場合、左の円が右の円に置き換わるということになり、拡張とは言い難い。もう一つの可能性は、「《気前の良い江戸っ子》から出発して、それが“不当に一般化”されて《江戸っ子》全般にまで拡張した（図示するなら、2 つの円の重なる部分から江戸っ子の円に拡張した）」と考えることであるけれども、この一般化は上のコミュニケーションにおいて、特に関与的とは言い難い。どちらの場合よりも、《江戸っ子》をその集合の一部分しか占めていないはずの《気前の良い江戸っ子》に特殊化したと考える方が適当である（既に述べたように、逆隠喩である限り江戸っ子以外は趣意に含まない）。図で表すと、江戸っ子の円から 2 つの円の重なる部分に縮小したということになる。言語表現として現れていて、それゆえ媒体として出発点になるのは江戸っ子であり、趣意《気前の良い江戸っ子》は、それを手がかりとして、コンテクストの助けを借りて新しく成立すると考えるのが適当であろう。

4.2.　語彙語用論的分析：アドホック概念・推意された前提としての逆隠喩

逆隠喩の媒体から趣意への変化を以上のように捉え直した上で、本稿の分析を提示する。佐藤が逆隠喩を提起してから 30 年以上の歳月が流れた間に、逆隠喩の解釈を分析する枠組みと、その枠組みにおいて逆隠喩が占める位置が用意された。その枠組とは、語が使用された際に語に符号化された意味から語が伝達した意味へとどのように調整がなされ、聞き手が前者から後者へといかにして辿り着くかを研究する語彙語用論である。本稿では特に関連性理論の語彙語用論を採用する。

語彙語用論において、語の伝達された意味が生じる主なプロセスとして、語彙的拡張（lexical broadening）と語彙的縮小（lexical narrowing、「絞り込み」とも言う）がある。語彙的拡張とは、厳密には符号化された意味に収まらないものをも含むように意味が（外延について言えば）拡張することである。たとえば、「1 時間」は符号化された意味が 60 分＝3600 秒と明確に決まっているけれども、(5) の聞き手は普通そのようには受け取らず、1 時間前後の時間をも含むように拡張して解釈する。

テレオタイプに含まれる気前が良いという性質で代用することにする。

(5)　山手線は1周1時間〈≒約1時間〉だ。

一方、語彙的縮小とは、符号化された意味より特定化した意味が伝わるもので、伝わる語用論的意味は（外延について言えば）符号化された意味より縮小する。次の例の「距離」は、《話し手・聞き手が歩くには辛いほど長い距離》のような特定化した意味を担い、距離がゼロではないということを発話が伝えているとは解釈されない。

(6)　ここから駅までは距離がある。

逆隠喩も語彙的縮小である。佐藤（[1983] 1987b: 125）の例を元にして作った次の談話における逆隠喩表現の解釈を考えよう。

(7)　状況：元オリンピック選手で国会議員の太郎に嘘をついたという疑惑がある。
　　A:　なにしろあいつは政治家だから。
　　B:　あの人はスポーツマンだから、まさか。

この「政治家」・「スポーツマン」はどのように解釈されるのか。趣意はそれぞれ《嘘つきの政治家》・《率直なスポーツマン》のようなものと考えられる。先行研究ではこの趣意をステレオタイプという概念で捉えようとしていた。それに対して本研究では、関連性理論の語彙語用論の標準的な説明に従って、これを字義通りのものとはいくらか異なるアドホック概念という概念で捉える（カーストン [2002] 2008, Wilson and Sperber [2002] 2012）。先行研究に従い、アドホック概念は出発点となった概念を表わす形式に「*」をつけて表記することにすると、この「政治家」や「スポーツマン」はアドホック概念である《政治家*》（≒嘘つきの政治家）、《スポーツマン*》（≒率直なスポーツマン）を伝達するということになる。さまざまなタイプのアドホック概念構築（近似（表現）、カテゴリー拡張、誇張法、隠喩、語彙的拡張、語彙的縮小など）の中で、逆隠喩は語彙的縮小ということになる。[9] もっとも、これらのカテゴリーはアドホック概念構築の出発点となる符号化された概念と、解釈において構築されたアドホック概念を比較した結果の分類であって、そのような区別は可能だけれども、現象の説明において何ら役割を果たすものではない。アドホック概念構築の仕方は全て同じ原則に従うからである。

では、アドホック概念構築はなぜ・どのように起こるのか。関連性理論の語彙語用論では語彙的拡張も語彙的縮小も関連性の探索の副産物として生じると考えられている。具体

[9] 本稿のここまでの議論と同様、「縮小」「拡大」というのは語の意味の外延的側面に注目した言い方であるものの、以下の説明で問題となるのは、専ら概念の特性であり、どちらかというと内包に近い。外延の縮小・拡大はその結果にすぎず、それ自体が説明において重要な役割を担うわけではない。

的には、発話を向けられた聞き手は、拡張・縮小の場合に限らず一般に、その状況におけるその発話への特定の関連性の期待が満たされるまで、最小の処理労力をかけつつ、①発話の明示的内容（語の表現する概念を含む）、②コンテクストとして発話解釈に用いる想定、③発話の認知効果の 3 つを相互に調整する。[10] この相互調整の中で、語の表現する意味の調整がアドホック概念の構築によって行われる。語彙的縮小の場合は、符号化された概念を出発点に、そこからアクセスできる百科事典的情報を利用してアドホック概念を構築し、明示的内容に組み入れるということである。なお、符号化された概念とは文脈中立的なもので、たとえば、「スポーツマン」、「政治家」はそれぞれ、（個人差のある百科事典的情報や文脈依存的なコノテーションを含まない単なる）《スポーツをする男》、《仕事として政治を行う者》と近似できるものを符号化していると考える。[11]

たとえば (7)B の逆隠喩「スポーツマン」は以下のように分析される。まず、想定される状況では、太郎の悪い噂について最適な関連性を達成するという発話への特定の期待があると考えられる。この期待のもとで、①②③の相互調整が行われる。

①発話の明示的内容：符号化されたスポーツマンの概念からアクセスできる百科事典的情報が活性化する。特に《率直だ》という特性は、悪い噂の先行文脈のためにアクセスが容易である。聞き手はそれにアクセスし、アドホック概念の《スポーツマン*》（≒率直なスポーツマン）を構築して明示的内容に組み込み、《太郎はスポーツマン* だ》が得られる。なお、ここでは、聞き手のスポーツマンについての百科事典的知識に《率直だ》とい

---

[10] 査読の過程において、解釈にあたって「文脈情報」が重要なのに、それを全く考慮に入れずに説明しようとしているように読める箇所があるとの指摘をいただいた。「文脈情報」とは、先行する発話、発話の状況、逆隠喩表現を含む文の残りの表現等のことのようである。関連性理論の「コンテクスト」はこれら（の心的表示）に限られるものではないが、関連性理論の説明においてこれらが考慮されないことはあり得ない。逆隠喩表現を含む文の残りの表現が表わす情報は①発話の明示的内容に貢献し、先行発話の伝達した想定や発話状況は②コンテクストとして発話解釈に用いる想定として選択されることがあるだけでなく、③発話の期待される認知効果にも影響を与えるからである。①②③は相互調整されるため、当然形成されるアドホック概念がどのようなものになるのか（①の一部）も選ばれた文脈情報の影響を受ける。

[11] 符号化された概念がどのようなものかは関連性理論の中で議論が続いている（たとえば、カーストン [2002] 2008: 5.4, Carston 2012 参照）。ここでは関連性理論において標準的なモデル（スペルベル・ウィルソン [1995] 1999: 2.4）に従って、（単純語が符号化する）概念自体は内部構造のない原子的なもので、それが記憶のアドレスとして論理的記載事項、百科事典的記載事項、語彙的記載事項へのアクセスを可能にすると考える。（原子的なものの場合、本文中に《 》で示したようなパラフレーズは厳密には不可能である。）語彙的記載事項は発音や品詞などの言語的情報であり、論理的記載事項はその概念を含む論理形式に適用することが論理的に保証されている演繹規則の集合で、この 2 つには個人差がほとんどない。百科事典的記載事項はそうではなく、個人差が大きく、その概念が字義通りに当てはまる対象全てが持つわけではない情報をも含む。カーストン（[2002] 2008: 505 の思うところ）によると、語彙的縮小においてアドホック概念は、符号化されている概念の百科事典的記載事項の一部を論理的な（つまり内容構成的な）ものにすることによって形成される。

う特性が含まれている場合を想定している。そのような知識がない場合、たとえば、聞き手が率直なスポーツマンに会ったことがなく、そんな者は存在しないと思っている場合でも、太郎がスポーツマンであることを根拠に彼が嘘をついたという噂に話し手が懐疑的な態度を取っていることが明らかな状況では、適切なアドホック概念を聞き手が構築できる可能性が高い。

②コンテクスト的想定：期待される類の認知効果を導く推論の前提となり、アクセスが容易な想定として《スポーツマン* は率直だ》が選ばれる。これは関連性理論の用語で言えば、推意された前提（implicated premise）であり、これも推意として伝わっていることになる。つまり、(7) の B は (8) のように、そして (7) の A は同様に (9) のように解釈される。

(8) B: 太郎はスポーツマン* だ。(表意) (「から」の意味は不問とする。)
　a. 推意された前提：スポーツマン* は率直だ。
　b. 推意された結論：太郎は率直だ。→…→太郎は潔白だ。
(9) A: 太郎は政治家* だ。(表意) (「なにしろ」の意味は不問とする。)
　a. 推意された前提：政治家* は嘘つきだ。
　b. 推意された結論：太郎は嘘つきだ。

先行研究が逆隠喩として主に注目していたのは、このアドホック概念と推意された前提の部分だったと言えよう。

③認知効果：(8) の表意と推意された前提から《太郎は率直だ》が演繹され、そこから比較的強い含意・比較的強い推意（両者の違いは Sperber and Wilson [2008] 2012c: 7 節参照）として、《太郎は潔白だ（と話し手は考えている）》が得られる。これで聞き手の関連性の期待が満たされる。なお、以上の過程は相互調整であり、必ずしも時間的に①②③の順で決まっていくのではない。特にアドホック概念を含む明示的内容を得るにあたっては、期待・予想される認知効果からの逆行推論（backwards inference）の貢献がある（Wilson and Sperber [2002] 2012）。つまり、演繹推論の前提→結論という順序ではなく、期待される認知効果を元にしてそのような含意を保証するように明示的内容を拡充するという推論が行われる。

4.3. 逆隠喩におけるステレオタイプの役割

逆隠喩の先行研究ではステレオタイプという概念に非常に重きが置かれているのは上で述べた通りである。佐藤（[1983] 1987b）も「ステレオタイプ」という表現は 1 度しか使っていないものの、「逆隠喩を、ことによるとイデオロギー効果一般の、単位レベルにおける原理的メカニズムとして想定することも、できなくはなさそうである」（pp. 125–126）と社会的に共有された信念という点で類似することを述べている。さらに、新グラ

イス派のレヴィンソン（[2000] 2008）の語彙的縮小の扱いにおいても、「単純に記述されていることは、ステレオタイプ的に例示される」(p. 38）という発見法（heuristic）が掲げられている。しかし、逆隠喩においてステレオタイプが不可欠で本質的な役割を演じるという先行研究の説には問題が多い。

4.3.1.　ステレオタイプ説の問題

第一に、ステレオタイプが複数ある場合、どれが選ばれるかが問題になる。たとえば、英語の bachelor には､少なくとも次の 3 種類のステレオタイプがある（カーストン [2002] 2008: 484）: 1. 若くて、異性愛者で、長い期間一緒に生活できる、つまり結婚相手に相応しい；2. 年長で、人と交わるのが不得手で、女性嫌い；3. 責任感がなく、恋愛を遊びと思っていて、いつまでも若い気持ちで自由を謳歌する。たとえば婚活中の若い女性の次の発話では、多くの場合に 1 が選ばれる。このことをステレオタイプ説はどう予測できるのだろうか。

（10）　I want to meet some *bachelors*.　　（カーストン [2002] 2008: 480）

もちろん、適切なステレオタイプを選択するには、コンテクストの参照が必要である。ステレオタイプ説ではこの点が説明に取り込まれておらず、少なくとも語用論の観点からは理論として不充分である。しかも、この話し手の男性の好み（たとえば、高学歴）が聞き手に知られていて相互顕在的であったら、1 にその属性を加えたものとして上の “bachelor” は解釈されるかもしれない。そうなると、伝達された意味は、広く社会に共有されていないものであるためにステレオタイプから外れる。

第二に、逆隠喩で語彙的意味に加えて伝達されている特徴がステレオタイプに含まれないことがある。たとえば、(2) の「従兄（いとこ）」の例では、《性的対象でない》という特徴が伝達されているものの、それを含んだステレオタイプがあるとは言い難い（査読コメントより)。また、以前の筆者のように《率直だ》というステレオタイプをスポーツマンに抱いていないし知らない聞き手にとっては、そのようなステレオタイプは無いも同然である。それでも（1）の逆隠喩を正しく解釈できる可能性は高いだろうから、どのようにしてそれができるのかも説明する必要がある。

第三に、ステレオタイプがたとえ 1 つでも、どの部分が逆隠喩で用いられるかを説明する必要がある。たとえば、(1) ではなぜ《率直だ》という特徴よりもスポーツマンについて広く共有されていると思われる《体力がある》などが活用されないのだろうか。単なるステレオタイプに基づく連想としてはどれを選ぶことも可能なはずである。ステレオタ

イプの概念だけではこのことが説明できない。[12]

最後に、そもそもなぜステレオタイプの解釈をするのかという根本的な疑問も残る（カーストン [2002] 2008: 3 章、注 6）。

4.3.2. 関連性理論の語彙語用論による問題への答え

本稿の説明には、ステレオタイプ説に伴う上記の問題点はない。以上で問題となったことは全て、推論において推意された前提として用いられるコンテクスト的想定として何が選ばれるかという一般的な問題の特殊ケースであり、逆隠喩の趣意・アドホック概念として何が伝わるかという問いに対しては、関連性理論の一般的な説明が答えを与える。まず、逆隠喩の関わらない次の例を考えよう。

（11） 太郎： 最近出た僕の論文読んだ？
花子： 私はバカの書いたものは読みません。

この例において太郎は、以下の理由のために推意された前提《太郎はバカだ》を導入する。太郎は自分の質問の答えを得ることで最適な関連性の期待を満たすべく、花子の発話を解釈する。具体的には、構築した表意《花子はバカの書いたものは読まない》とその前提を組み合わせて、推意された結論《花子は太郎の書いたものは読まない》を演繹し、そこから《花子は最近出た太郎の書いた論文を読んでいない》という含意を得る。太郎はたとえ自分がバカだと信じていなくても、《太郎はバカだ》を導入できるし、そうせざるを得ないということが重要である。なお、《太郎はバカではない》を導入してどうにかして《花子は太郎の論文を読んだ》を導こうとする推論は、処理労力の面でも認知効果（特に結論の確信度）の点でも《太郎はバカだ》を導入する場合に劣り、従って最適の関連性を達成しないために行われない。

逆隠喩の趣意が伝わるのも最適な関連性の期待が満たされるためである。趣意に加わるのは、逆隠喩表現に符号化された概念からアクセスできる百科事典的情報で、推意された前提として導入することで期待を満たす結論を導けるようなものである。その選択においては、当然、逆隠喩表現以外から得られるコンテクスト的情報も重要な役割を演じる。たとえば、(7)B の「太郎はスポーツマンだから、まさか」の解釈の際には、A の発話への B の非言語的反応、B の発話に伴うパラ言語的情報、そして「まさか」などに基づくコンテクスト的想定などが《太郎は嘘つきではない》という含意を活性化させる。これらとともに解釈される「彼はスポーツマンだから」はこの含意を保証する方向に解釈されて《ス

[12] ステレオタイプのような連想に基づく説明よりも、本稿のような推論に基づく説明の方が理論として好ましいという点は、Wilson and Carston（[2007] 2012）参照。両アプローチの比較は、Sperber and Wilson（[2008] 2012c）も参照。

ポーツマン*》が構築されることになる。(10) の “bachelor” の解釈においてそれが伝える解釈がステレオタイプ 1 に合致するとしたら、前述の①②③の相互調整が行われて、期待された認知効果が得られるように解釈を行うという、関連性理論の主張する一般的な解釈プロセスに従った結果としてそうなったのである。

(11) の太郎は自分が信じていないことでも推意された前提として導入できる。これと同様に、逆隠喩の聞き手は話し手が逆隠喩に利用したステレオタイプを共有していなくても適切に解釈できる。たとえば、(7) の状況にある聞き手としての A は、スポーツマンは率直だと考えていなくても、そのことを推意された前提として補えるだろう。[13] ステレオタイプが逆隠喩に利用されていてもそれは必ずしも共有されている必要はないのである。文法・語彙といった言語知識の差を埋め合わせることは、語用論的推論の最も重要な役割の一つである (Wilson and Carston [2007] 2012: 122)。

ステレオタイプ説の第三の問題──ステレオタイプに含まれるどの情報が解釈に用いられるか──にも既に答えが与えられている。最適の関連性の期待を満たすべく、期待される認知効果を保証するようなアドホック概念が構築され、それに相応しい情報が用いられるということである。逆隠喩表現を元に構築されたアドホック概念はステレオタイプに合致している必要はないため、そもそもなぜステレオタイプの解釈をするのかという疑問が生じないことは言うまでもない。

4.3.3.　本稿の分析とステレオタイプの関係

本研究は、ステレオタイプの存在自体を否定はしないし、逆隠喩の解釈がステレオタイプに合致し得ることも認める。ステレオタイプが本稿の説明で役割を演じるとしたら、関連性の高さを決める一面、処理労力の面においてである。ステレオタイプの持つ属性は符号化された概念が活性化する百科事典的情報の中で、頻用されるためにまとまりとしてアクセスしやすくなっていると考えられる (Wilson and Carston [2007] 2012: 127)。アクセスが容易ということは、処理労力がかからず、その分関連性が高まるため、最適の関連性を期待する聞き手に用いられやすいということになる。

さらに、ステレオタイプの起源の少なくとも一つとして、アドホック概念が考えられる。たとえば、ある若い婚活中の女性の発話 (10) の “bachelor” を適切に解釈することは、前述のステレオタイプ 1 をあらかじめ持っていなくても可能だろう。発話者が結婚相手として bachelor を探しているということを理解すれば、結婚していない成人男性という論理的特性だけから、若くて、異性愛者で、長い期間一緒に生活できるといった特性

[13] 佐藤 ([1978] 1992：1 章) に、媒体をよく知らなくても直喩が理解できることが述べられている。そのメカニズムの少なくとも一端として同様のことがあろう。

を持った独身男性へと縮小して解釈できるからである。同様のことが話し手側にも言える。(10) の発話によってそのように縮小した bachelor を伝達するのに、出来合いのステレオタイプ 1 をあらかじめ持っている必要はない（Sperber and Wilson [1998] 2012b: 4 節)。そして、そのような情報のまとまりに基づくアドホック概念が繰り返し構築されると徐々にルーチン化し、ルーチン化した者にはアドホックな概念の構築は必要なくなるし、やがてそれが社会に広く共有された信念となればステレオタイプ、さらには新たな独立した語義にもなり得る（Sperber and Wilson [1998] 2012b: 43, Wilson and Carston [2007] 2012: 120)。

以上で述べたように、逆隠喩はアドホック概念構築を含む一般的な発話解釈の方法に沿って解釈されているだけであり、ステレオタイプが参照される必要が常にあるわけではない。従って、逆隠喩で語彙的意味に加えて伝達されている特徴がステレオタイプに含まれないことがあっても本稿の説明には何ら問題とならない。ステレオタイプが関与するとすれば、それが定着しているためにアクセスしやすくなっていて、そのため処理労力が低く、その分関連性が高くなるからという一般的な理由によるものであり、ステレオタイプの関与は逆隠喩に固有の特徴とは考えられない。逆隠喩を適切に説明するためには、ステレオタイプの概念だけでは不足で、発話解釈に必要な語用論的推論を考慮に入れなければならないのである。本稿の提示したアドホック概念形成による説明は、このようにステレオタイプの概念を取り込みつつ、ステレオタイプ説では説明できない例を扱えるという二重の意味で包括的である点においてステレオタイプ説より優れていると筆者は主張する。

前述の通り、逆隠喩を提唱した佐藤（[1982, 1983] 1987a, b）もステレオタイプ説に位置付けられる（籾山 2016: 92)。しかし、佐藤の議論の原点に立ち返って、逆隠喩は第一に転義の一類型であると考え、その適切な特徴づけは語彙的縮小であるとするならば、逆隠喩にステレオタイプの関与が必然的だとする必要はない。そうならばステレオタイプの解釈にならない (6) の「距離」のような語彙的縮小の例も逆隠喩とみなせるだろう。

4.4. 語彙的縮小説のインプリケーション

第一に、森（2007）は、佐藤（[1982, 1983] 1987a, b）が逆隠喩と呼んでいた現象こそが代表させる提喩の逆のプロセスだと主張している。この考えは語彙的縮小説でも受け継がれ、逆隠喩は敢えて分類するなら提喩の一環と位置付けられる。なお、種によって代表させる提喩は、少なくとも符号化された概念と伝達された概念を比較する限りでは、語彙的拡張の一種である。もっとも、語彙的縮小と語彙的拡張は逆のプロセスではあるものの、相互排他的なものではない。たとえば、

(12) フランスは六角形である （オースティン [1962] 1978: 238）

という例は、しばしば語彙的拡張として、つまり《6 本の線分で囲まれた図形》が《6 つ

の真っ直ぐに近い線で囲われた形》のような意味で使われていると分析されるけれども、符号化された意味での《六角形》においては 6 辺の長さの割合は決められていないのに対し、この例で伝達された《六角形*》では 6 辺の長さはほぼ同じである（ただし、原文の英語 “hexagonal” においては、各辺の長さが等しいことは符号化された意味に含まれる）。つまり、この例の「六角形」は《六角形*》（≒おおよそ正六角形で各辺が直線でないもの）として理解される。《六角形》から《正六角形》への変化は語彙的縮小であるから、この例では語彙的拡張と語彙的縮小が同時に起こっていると言える。このような現象は種による提喩と類による提喩の二分法では想定されておらず、隠喩とされるかもしれない。ここで重要なのは、隠喩／提喩という区別は可能ではあるものの、その区別に語用理論的な意義はないということである（6.2 節）。もちろんこのことは、表現の教則としてのレトリックにおいてその区別が有益かどうかとは無関係である。

第二に、逆隠喩は隠喩の逆かという問いに対して、森（2007: 170）は否と答えている。関連性理論では隠喩は語彙的拡張として扱われることがある（たとえば、入門書の ウィルスン・ウォートン 2009: 11 章）。そうなると、逆隠喩は隠喩の逆となり、実際、Wilson（2003: 281）は隠喩と縮小は相補的なプロセスとしている。しかし、ほとんどの隠喩には拡張と縮小の両方が伴う（Sperber and Wilson [2008] 2012c: 111）。そうだとすれば、逆隠喩を隠喩の逆と捉えるのは妥当ではないということになる。

第三に、佐藤（[1983] 1987b）は「逆隠喩の本質的な特性のひとつは、それが《分類》の弾性化ないし交錯にある […]。そして、ある個体をことなるふたつ以上の分類法の交錯によって認識するというメカニズムのあるところには、たいてい、ほとんどミクロ・イデオロギー作用すら感じられぬかたちで、逆隠喩作用があらわれる」（p. 138）と述べている。しかし、これまでの観察では、逆隠喩においては、それが適用されているメンバーが属する政治家、スポーツマンといったカテゴリー1 つとその成員の特性が関わっているだけで、2 つ以上のカテゴリーが関わっているとは言い難い。この点は、ある国の国民全体をある動物に例えるような隠喩において 2 つのカテゴリーが関わっているのとは異なる。逆隠喩の本質的な特性として分類の弾性化は認められても、交錯を認めることはできないだろう。

5.　今後の逆隠喩研究の展開の可能性

5.1.　逆直喩

逆隠喩にも隠喩に対する直喩に相当するもの──いわば逆直喩──があるのだろうか。形の上では、隠喩に「まるで」や「～のような」といった標識が付いたものが直喩であり、提喩と換喩にも同様の区別が考えられることが森（2002）で論じられている。逆隠喩にも

そのような標識と考えられるものがある。[14]

（13）（気前よくお金を払った東京出身者の太郎に）太郎はさすが江戸っ子だ。
（14）（気前よくお金を払わなかった太郎に）太郎は江戸っ子らしくないねぇ。

これらの例の「さすが」「らしい」は、前後の名詞をそれが符号化していない特定の特性を伴って解釈することを促すため、逆直喩の標識と言えるだろう。隠喩と直喩では喩辞の表すものが異なることが Glucksberg（2008）などで示されているが、逆隠喩と逆直喩にも標識の有無を超えた実質的な違いがあるのかといったことが今後の課題となる。

5.2. 名詞以外の逆隠喩

佐藤の挙げた逆隠喩の例は名詞ばかりだったが、隠喩同様に名詞以外の逆隠喩も可能だろうか。たとえば次の例はどうだろうか。

（15） A: 「あいつ、なんで最近昼メシにカップ麺ばかり食ってんの？」
B: 「家買ったらしいよ」（査読コメントより）

この例では、家を買うという行為に付随する多額の出費をするという行為も伝達されているため、《政治家》のカテゴリーのメンバーにしばしば付随する《嘘つき》のような属性をも伝達する（1）と同様の逆隠喩とみなせる。ただ、この解釈に関与するのは家を買うことのフレームであり、レトリックの観点からは、単一の行為のフレームが関与するとされる換喩（西村 2004）ともみなせるかもしれない。思わぬところで提喩（の一環である逆隠喩）と換喩が接することになった。畢竟、言語表現の解釈にはコンテクストが重要であり、それには百科事典的知識が含まれることを考えると、この点において両者が接点を持つのは不思議なことではなかろう。

6. おわりに：レトリックと語用論

以上本稿では、逆隠喩を関連性理論の語彙語用論の観点から再検討し、逆隠喩はアドホック概念を形成する語彙的縮小だと主張した。最後に、本号の特集の趣旨に鑑み、レトリックと語用論の関係を論じてこの稿の締めくくりとしたい。

[14] この標識の有無は、本稿冒頭で触れた潜在型／顕在型の区別とは異なる。潜在型と顕在型の区別は隠喩にも直喩にもある（佐藤・佐々木・松尾 2006: 2–1–4–7）。

6.1.　語用論から見た佐藤信夫のレトリック論

佐藤信夫のレトリック論は、認知言語学的修辞研究を予見するものとして森（2004）、西村（2004）などで高く評価されているものの、語用論からの評価は管見の及ぶ限り見当たらない。佐藤の諸論考は語用論の観点からも先駆的であったと筆者は考える。

森（2007）、籾山（2016）、及び本稿は、論文「逆隠喩」（佐藤 [1983] 1987b）の前半を主に参照し、後半はあまり顧みていない。この論文の後半では逆隠喩から一旦離れて、格言が一段論法であり、「《前提を導き出すための結論》という倒錯的ロゴスとして、まさに（レトリック概念としての）トポスの機能を体現する表現形式」（p. 137）だということが主張されている。そして、都合のいい前提への誘導のために（伝統的なレトリック用語としての）エートス＝パトスのトポス構造が利用されるとのことである。この部分は逆隠喩とのつながりが見出しにくく、晦渋と言わざるを得ない。

しかし、関連性理論の観点からは、この「レトリック的なエートス＝パトス概念」とは 2 つの関連性の原理に相当するものと考えられ、これが解釈の鍵となるように思われる。そこでのエートスとは「受信者がわから発信者に投影される信頼性」（p. 137）のことである。受信者は発信者の発話が自身にとって最適の関連性を持つと期待できるということを関連性の伝達的原理は主張しており、この期待できるということが信頼性に相当すると考えられる。そして、そこでのパトスとは、「発信者がわから操作ないし予期しうるものとして見られた受信者の感受性」（p. 137）のことだが、これは関連性の認知的原理が主張する人間の認知の性質（つまり、関連性を最大にするように働く）にあたると考えられる。関連性理論の主張によると、受信者の感受性が操作・予期できるのは、受信者の認知にこの原理が成り立ち、心の理論によって発信者が受信者の心的状態をかなりの程度正確に見通せるからである。そして、「都合のいい前提への誘導」というのは、（11）の花子の発話「私はバカの書いたものは読みません」から聞き手が信じていない《太郎はバカだ》という推意された前提を導き出すようなことと考えられる。上述の通り、このようなことが可能であるのは、伝達的原理が主張するように、聞き手が最適の関連性の期待に導かれて発話解釈を行うためであり、認知的原理はその前提として成り立っている必要がある。逆隠喩においても、期待される認知効果は「前提を導き出すための結論」であり、この結論を保証するようにアドホック概念を含む前提を導入するのであった。

このように、佐藤の論考には語彙的縮小以外にも、その後の語用論で重要となる概念の先駆けが観察される。もう一つ例を挙げると、「すべての言語表現においてあらゆる語は、使われる一回ごとに意味を伸縮させているのではないか、と考えてみてもいいはずである」（佐藤 [1983] 1986: 12）と佐藤は提案しているが、関連性理論の語彙語用論では、内容語が使われるたびにアドホック概念が構築されるという可能性が検討されている（カーストン [2002] 2008: 5.4 など）。

6.2. レトリック研究と語用論

最後に、研究分野としてのレトリックと語用論の関係について若干考察して本稿を終わりたい。語用論、特に関連性理論の研究者がレトリック研究に向ける目は厳しい。たとえば、Sperber and Wilson（[1990] 2012a: 96）では、「レトリックは研究主題を何も専有していない。なぜなら、レトリックが自分自身のものと主張する現象と問題は、自律的なカテゴリーではなく、異種混合した項目の集合同然だからである。その集合は解体され、個々の項目は人間のコミュニケーションへの認知的アプローチのより広い枠組みにおいて研究されるべきである」（筆者訳）と述べられている。具体的には、メタファー、アイロニーなどの修辞技法は、修辞的でない言語表現の解釈にも等しく用いられる原理で統一的に扱うことが可能であり、レトリック理論が作り上げた分類体系とそれが含むカテゴリーは、語用理論において不要だとも言われている。[15] 本稿で扱った逆隠喩は、一般的な発話解釈原理に従って起こるプロセスである語彙的縮小に還元された。

では、語用論研究にとってレトリック研究は無益無要なのだろうか。筆者はそうではないと考える。Sperber and Wilson は、修辞技法を教えることには一つだけ議論の余地のない帰結があると述べている。それは、既に自発的にやってきたこと、つまり修辞技法を用いることに自覚を与えることである（p. 96）。彼らはこれを否定的に捉えている。しかし、日々無意識に行っている言語使用に意識を向けることは言語研究の第一歩であり、これからもレトリック研究は研究者にとって気付きと示唆を与えるという意味で語用論にとって有益であり続けるだろう。

参照文献

オースティン, J. L.（坂本百大訳）. [1962] 1978.『言語と行為』東京：大修館書店.

カーストン, R.（内田聖二他訳）. [2002] 2008.『思考と発話：明示的伝達の語用論』東京：研究社.

Carston, Robyn. 2012. Word Meaning and Concept Expressed. *The Linguistic Review*, 29(4): 607–623.

Glucksberg, S. 2008. How Metaphors Create Categories—Quickly. In R.W. Gibbs Jr.（ed.）, *The Cambridge Handbook of Metaphor and Thought*, 67–83. Cambridge: Cambridge University Press.

グループ μ.（佐々木健一・樋口桂子訳）. [1970] 1981.『一般修辞学』東京：大修館書店.

楠見孝. 1990.「直観的推論のヒューリスティックスとしての比喩の機能」、『トランスフォーメーションの記号論』、197–208、神奈川：東海大学出版会.

[15] 前述の通り、レトリック理論の分類体系とカテゴリーが教則としてのレトリックにおいて有用であるかは別問題である。

レヴィンソン , S. C.（田中廣明・五十嵐海理訳）[2000] 2008.『意味の推定：新グライス学派の語用論』東京：研究社.

籾山洋介.　2016.　「ステレオタイプの認知意味論」、山梨正明他（編）『認知言語学論考 No. 13』、71–105、東京：ひつじ書房.

森雄一.　2002.「明示的提喩・換喩形式をめぐって」、山梨正明他（編）『認知言語学論考 No. 2』、1–24、東京：ひつじ書房.

森雄一. 2004.「問題群としてのレトリック」、成蹊大学文学部学会（編）『レトリック連環』、61–83、東京：風間書房.

森雄一. 2007.「隠喩・提喩・逆隠喩」、楠見孝（編）『メタファー研究の最前線』、159–175、東京：ひつじ書房.

西村義樹. 2004.「換喩の言語学」、成蹊大学文学部学会（編）『レトリック連環』、85–108、東京：風間書房.

佐藤信夫. [1982] 1987a.「転義あるいは比喩のかたち──または逆隠喩について──」、『レトリックの消息』、102–121、東京：白水社.

佐藤信夫. [1983] 1987b.「逆隠喩」、『レトリックの消息』、122–139、東京：白水社.

佐藤信夫. [1978] 1992.『レトリック感覚』東京：講談社.

佐藤信夫・佐々木健一・松尾大. 2006.『レトリック事典』東京：大修館書店.

スペルベル , D.・ウィルソン , D.（内田聖二他訳）. [1995] 1999.『関連性理論：認知と伝達』（第 2 版）東京：研究社.

Sperber, D. and Wilson, D. [1990] 2012a. Rhetoric and Relevance. In D. Wilson and D. Sperber, *Meaning and Relevance*, 84–96. Cambridge: Cambridge University Press.

Sperber, D. and Wilson, D. [1998] 2012b. The Mapping between the Mental and Public Lexicon. In D. Wilson and D. Sperber, *Meaning and Relevance*, 31–46. Cambridge: Cambridge University Press.

Sperber, D. and Wilson, D. [2008] 2012c. A Deflationary Account of Metaphors. In D. Wilson and D. Sperber, *Meaning and Relevance*, 97–122. Cambridge: Cambridge University Press.

内海彰. 2008.「グループ μ の「隠喩の二重提喩論」再考──（二段階）カテゴリー化理論との関係──」日本認知科学会「文学と認知・コンピュータ研究分科会 II」第 15 回定例研究会資料、G15–03／人工知能学会第 29 回ことば工学研究会資料、51–62.　[http://www.utm.inf.uec.ac.jp/~utsumi/paper/lcc15-utsumi.pdf]

山泉実.　2005.　「シネクドキの認知意味論へ向けて：類によるシネクドキ再考」、山梨正明他（編）、『認知言語学論考 No. 4』、271–312、東京：ひつじ書房.

山泉実. 2006.「ドメインの統一による種で類全体を表す表現の分析」、『日本認知言語学会論文集』6、288–298.

Wałaszewska, E. 2015. *Relevance-Theoretic Lexical Pragmatics*. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing.

Wilson, D. 2003. Relevance and Lexical Pragmatics. *Rivista di Linguistica* 15(2), 273–291.

Wilson, D. and Carston, R. [2007] 2012. A Unitary Approach to Lexical Pragmatics: Relevance, Inference, and Ad Hoc Concepts. In Asa Kasher (ed.), *Pragmatics II: Critical*

Concepts, *Vol. 2:* 112–139. Milton Park, Abingdon: Routledge.

Wison, D. and Sperber, D. [2002] 2012. Truthfulness and Relevance. In D. Wilson and D. Sperber, *Meaning and Relevance*, 47–83. Cambridge: Cambridge University Press.

ウィルスン , D.・ウォートン , T.（今井邦彦編、井門亮他訳）. 2009.『最新語用論入門 12 章』東京：大修館書店.